

# 教 仁 名 聞

第80号  
(発行日)

2017年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日 午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日 午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日 午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 憂いの波も届かぬ底

西田幾太郎博士と言えれば近代日本が生んだ最も優れた哲学者といわれています。

博士は一八七〇年(明治三年)に石川県河北郡に生まれ、哲学を志す中で、若き日坐禅の行に打ち込み、七十五才で生涯を閉じるまで人間の根本問題を考えぬきました。京都大学の哲学の教授として生活する中、一九一八年、西田が四十八才の時に母を失い、次の年に妻が脳溢血に倒れ(五年後死去)、五十歳の時長男が死去、翌年三女静子が結核になるなどの苦難が続きました。このころの博士の歌に

子は右に母は左に床をなべ  
春は来れども起つ様もなし  
かくてのみ生くべきものか  
これの世に

五年こなた安き日もなし  
とありますが、そのときの状況がよく表されていると思います。  
こういう苦しい状況の中で、

博士がどこに心のよりどころをおいておられたのでしょうか。それについて博士は次のような歌を詠んでおられます。

わが心深き底あり喜も憂の波もとどかじと思ふ

「安き日もなし」といわれる日常において、なお「喜びも憂いの波もとどか」ない底において生きておられるのです。

「喜びも憂いの波」というのは何でしょうか。それは私たちのゆれうごく心の状態であり、喜んだり悲しんだりうれしかったり嘆いたりして悲喜苦楽している感情であり、思いであり、総じて私たちの心の状態です。それは煩い悩むいわば煩惱妄念ともいえます。

こういう状態は博士だけではなく、私たちが日常つねに経験している心の状態です。

〈深き底あり〉という底は

私たちの心の中で決してありませぬ。かといって私に離れてどこかにあるのでもありません。全く私の心その他でありながら私に離れないものであります。すなわち他なるものでありながら、私の心の底、私のいのちの根底となつてくださっている確かな地盤、それが「悲喜の波のとどかない底」であります。

こんなことをいいますといよいよ分からなくなると思われるかも知れません。というのはそういう底は私の目に見えないもの、私の手出しのできないものであります。しかも私の全体を底でつかんでい

るものです。真宗の教えで言えば、それは私の心がどのように揺れ動き、荒れ狂い、あるいは有頂天にもなつても、私の全分を受け取り、摂め、抱いていて下さっているお方がますます。

いつでも今ここに共にまします。すなわち私の心の底となつて私を抱いて下さり離れない阿弥陀様がましますということ

南無阿弥陀仏というお念佛

はこの〈底〉から私を喚び続けておられる声であります。

我称え 我聞くなれど

ナムアマミダ

ここに在るその 親の喚び声

この喚び声によつて私は心の浮き沈みの中にありながら、底に支えられて生き抜かせていただけるのであります。

さらにいえば、阿弥陀仏は私の根底となつて私全体を支えて下さっていると共に、私を包んでいるはかりない温かきいのちであります。

そういう阿弥陀仏のことを西田博士は「内在的超越」ともいっています。

阿弥陀仏はそういう大悲のいのちであり、私たちと共にいて下さる。阿弥陀仏は南無阿弥陀仏のお念佛となり声となつて私にその都度であつて下さいます。

悲しい時も苦しい時も憂いの時も、阿弥陀仏は苦しみを共にし悲しみを共にして下さいます。

全てのものは、すべての現象は、日々夜々過ぎ去つてゆきますが、阿弥陀様だけはいつも私と共に離れがたく一つになつて下さっています。

(了)

# 信心の問いに志えて

問「真宗はだれでも救われる易しい教えであると言われるにも関わらず、救われていない人が多いのはなぜですか」

真宗は易行難信の法といわれています。行は極めて易しいのです。なぜなら真宗の行は一行で、称名念仏です。口にナムアマミダブツと称えるだけの行です。

しかし信心は「難信」あるいは「極難信」といわれています。弥陀の本願は私たちの側から信じることでできない法だからです。

難しいといってもそれは、私たちの側から易いとか難しいという比較を越えた難しさです。一生懸命努力すれば信じられるということすらいえないのです。

ということとは信心は如来様から与えられる信心だからです。自分で努力して作り出せる信心ではありません。信心の内実は本願であり、与えて下さる本願（仰せ）をそのままハイと受け入れている信心です。そういう意味では「あ

ら心得えやすの信心や」と蓮如上人が申されているとおりです。

本願の仰せとは「そのままなりで助ける」「まるまる引き受ける」という本願の仰せです。「汝の救いは弥陀が引き受ける」との仰せを聞いて、ああ有難いと受け入れている信心ですから、手間ヒマいらないので。

私がお浄土に生まれる、すなわち私が仏にならせて頂く因は、すべて如来法蔵様が既に仕上げて下さって「汝のあのままなりで引き受ける」と喚びづめに喚んで下さっているナムアマミダブツです。そのナムアマミダブツの仰せをその通りに受け取っている。オマカセしている外に信心はありません。だから実に単純ですが、あまり易しすぎてそれを疑ってしまうのです。

私の助かる手はずはすべてできあがっていて、それをお聞かせ頂くばかりです。そのお聞かせはナムアマミダブツの声となってお聞かせ下さるのです。その仰せを仰せのまま

に聞いている、あるいは聞き受けているばかりです。助ける法（仰せ）が難しいのではなく、私たちの方が難しくしているのです。

阿弥陀仏のお助けは不完全であると思うのは、お助けに何か難しい条件をつけられていると思っているからです。如来様は救いの全責任を引き受けて下さって、私に何も要求されず、私のこのままなりを「助ける」と仰せ下さるのです。

ただ、それを私たちははねつけているのです。聞きながら拒絶している、あるいは無視しているのです。あるいは自分の方に助かる証拠を見ようとしたり、助かる訳を知りたがっているのです。

こうしていわば私の側で難しくしているのです。それほど私たちは如来法蔵様の不思議な憐れみに対して自己主張をし、自分の考えを張り立てようとし、自分の方で助かりにかかっているのです。

そういう計らいのゆえに、本当は今ここですぐにお助けがいただけるにもかかわらず、いつまでも自分の邪見の角を如来様に突き立てているのです。

もう一つ言えば、法に対し

て「極難信の法」とまでいわれるのは、私の方からは全く信じることでできない法ゆえ、そのまま不思議と頂くだけ、聞くだけのことです。与えて下さるお助けを、ナムアマミダブツの大悲の仰せを、お知らせいただくだけであります。お知らせせざりであります。こちらの方から信じにかかり、助かりにかかる手を切つて下さる有難いお言葉が「難信の法であるぞ」ということです。信じられないまま、助からなのまま、そのまま如来様にまるまる引き受けていただくばかりです。

\* \*

問「お寺にお参りして「あなたこそ真宗を信じてますか」と尋ねると多くの人が信じてますといわれます。私はなかなか信じられずに困っているのですが」

真宗で言う信心もいつてみれば三種類あります。十九願と二十願と十八願の信心です。十九願と二十願の信心は仮の信心、十八願の信心は真実の信心です。十九願の信心というのは、真宗の教えを聞いて、分かって助かるうとし、聞いて理解し、納得して落ち着こうとする信心です。そして自

分が「納得できた」ことを信じたとしている信心です。これは自分の知性で理解したことを信じたといっているだけの信心です。

しかし教えを何度も聞いている内に、初めの「分かった」「納得できた」という感動も薄れ、いつも同じ事を聞かされて、頭では分かっても何か非常に物足りなくなってきました。そういう十九願の信心は、教義を聞いて憶えているだけ、いわゆる教義をつかんでいる信心です。教えの概念をつかんで理解しているだけで、実際の生の阿弥陀様（真実在）にふれていませんから、これでいいんだろうかという心がふつふつと湧いてきます。そういう時に「こんな私も阿弥陀様は救って下さるのだ」と、真宗の教義でもって自分の心を納得させて落ち着こうとするのです。あるいは「法蔵菩薩は一切衆生を助けなければ仏にならないと誓って既に阿弥陀仏になっておられる。だから私はもう助かっているのだ」と思つて安心しようとする。これも教義で納得して「これでいいのだ」と自分に言い聞かせているのです。あるいは「私はよく分からなくても既に今ここに生かされている

のだ。わからぬままに生きて  
いる、心臓も動く、手足も動  
く、今ここで既に阿弥陀様に  
生かされているのだ」という、  
いわば我ならざる働きのこと  
を思つて「これが他力であり、  
これによつて生かされている」  
と自分に言い聞かせているの  
です。

こういう信心は十九願の仮  
の信心であるといえましょう。  
ですから、お念佛も出てきま  
せんし、マンネリになつて新  
鮮な喜びが起りません。そ  
して教えをつかんで自分の心  
になでつけて安心しようとす  
るのです。これを「なでつけ  
安心」といいます。

そんな中で、どうしても何  
か心の底で気持ちが悪い、ど  
うも私は本当は分かつていな  
いのではないか、信じていな  
いのではないかと、そういう  
心が起こつてきます。その時  
にややもすると「こんな私だ  
から阿弥陀様は助けて下さる」  
となお自分に言い聞かせてそ  
こに留まつてしまいます。  
しかし、それでもなお「こ  
れではないかん」「どうもこれは  
本当ではない」と感じて更に  
聴聞を重ねます。しかしなが  
ら何時までたつても信心も起  
こらないし、心はいつもツク  
ネンとしたままです。

そういう状態になりますと、  
そこに「汝は自分でどうする  
こともできない、そのままな  
りて唯称えるばかりでよい」  
「称える一つで助ける」と聞  
く。いわゆる念仏往生の願を  
聞かせて頂く。ああ、私ほも  
うどうすることもできないの  
に、こんな私を阿弥陀様は「た  
だ念仏するばかりで良い、そ  
のほかになにもいらぬ」と  
まで仰せ下さつていて、と聞  
いて、ナムアマミダブツと称え  
る。「ただ念仏」一つにつかま  
ろうとします。

「汝を引き受ける。ただ我  
が名を称えよ」という念仏往  
生の誓いを聞いて「私はただ  
称えるだけで良かった」と念  
佛一つを最後のつかみ所とし  
てナムアマミダブツナムマンダ  
ブツと称える一つになろうと  
します。称える一つになるの  
ですが、なお「我が名を称え  
よ」という阿弥陀仏の大悲の  
仰せのその絶大な大悲大慈が  
とどかず、唯称える一つとい  
うところに留まる。意識的無  
意識的にも、称えて助かろう  
とする。それを二十願の信心  
といひます。  
しかるに、称えるばかり、  
と聞いて称え続けるのですが、  
やはり「どうも、どうも」と

いう気持ちの悪い、なおこれ  
でいいのだろうか、どうも怪  
しいとなつてくる。阿弥陀様  
にであつているといふ実感が  
わかない、となつてくる。け  
れどもそんな心だからいよいよ  
念仏一つでと、さらにお念  
仏を申すようになる。ところが  
が称えても称えてもどうも（分  
からぬ）が残る。

ところが、不思議なことに  
称えて助かろうとしていた私、  
どうもどうもとなお思つてい  
た私が、ふいと「ああ私の心  
には仏法も信心もない、こん  
な私を ナムアマミダブツ」と、  
もう一つ言えば「阿弥陀仏ご  
自身が喚んで下さつていて」  
ナムアマミダブツと知らされる。  
お念仏を求め、お念仏を称  
え、それによつて阿弥陀仏を  
知らず知らずつかんで安心し  
ようとしていた私が、とうと  
う逆に阿弥陀様につかまれて、  
ナムアマミダブツは阿弥陀様の  
「助ける」「引き受ける」のお  
心そのものであり、大悲の仰  
せそのものであつたと、自分  
からではないむこう様の方か  
ら知らされる。その信心を十  
八願の信心と申します。  
このように真宗の信心とい  
つても分けると三つあると、  
宗祖は明らかに示して下さい

ています。私たちの信心はど  
うなつていのかを照らし出  
して十八願の信心へと導きた  
まうのです。

\* \*  
問い「真宗の教えを信じなさ  
いといわれますが、浄土とは、  
本願とは、阿弥陀様とは、念  
佛とは、罪悪とは、なども皆分  
さんありますが、どれも皆分  
からなくてはだめですか、信  
じなくては助からんですか」

いいえそうではありません。  
確かに真宗の教えの裾野は広  
いです。ですから教えの内容  
はたくさんあるといつていい  
でしょう。

しかしそれらを分かろうと  
しても、分かるのは一部であ  
つて全部はとも分かるもの  
ではありません。  
たとえば阿弥陀仏のお浄土  
はどんなところかとお聞きし  
ても、いつまで聞いても漠然  
としていのです。クリアー  
にはとても分かりません。阿  
弥陀仏も同じです。罪悪深重  
といつても仏様が仰せ下さる  
ほどにはとても罪悪深重とは  
思えないものです。  
それを全部分からなくては  
助からないとすれば誰も助か  
りません。全部分かっている  
のは仏様だけです。愚かな凡

夫はいつまでたつてもぼんや  
りしたものです。

それではまったく漠然とし  
てだけでいいのか、全く分か  
らなくていいのかといへば、  
そうではありません、一句を  
聞き開くだけでいいのです。  
南無阿弥陀仏の一句、そのお  
心、いわば「助ける」「引き受  
ける」「ここに在る」という一  
句のお心を知らしていただく  
だけで、阿弥陀仏にあうので  
す。阿弥陀仏にであうと、あ  
とは漠然としていてもいいの  
です。

浄土がどんなところか、阿  
弥陀仏の本質は何か、罪悪深  
重の深さはどんな深さか、こ  
の世はどういう所か、私は何  
ものか、そういうことがぼん  
やりしていてもいいのです。  
南無阿弥陀仏の一句によつ  
て阿弥陀様と私は離れない、  
摂取されているという一点が  
知らされます。「汝を捨てない  
ものがここに汝とともに居る」  
という一つが知らされる。そ  
れだけでケリがつくのです。  
一句を聞き開くだけでいいの  
です。

ただし教法の学びはどれだ  
け学ばしていただいてもいい  
のであつて、これでいいと底  
を入れる必要はありません。

# お便り

丁氏

私共にとって本当に大切なことは、如来の仰せ、本願のおこころ、お念佛のこころを聞くこと一つのように思います。「ああそうか。この阿弥陀さんに助けられるのであったか。有難い」ということは、私の心に大悲が届いた、或いはお念佛の大悲がようやく私の疑情、はからいを貫いたのであります。臨終の一念に至るまで、決して煩惱、我執、無明はなくならないの仰せにあるように、今も自らを憑む心は現存するのであります。やはり先生の仰るとおり「この我が身、我が心では間に合わない」という一点で、徹底的に貫き、打ち砕き続けるものが、お念佛であります。〔我が名を称えよ〕という具体的行とそれを在らしめる大悲に、たすけられるのが、浄土真宗であり、先生から聞かせていただく念仏往生であります。渡邊先生のお話しも有難く聞かせて頂きました。身業説法。たとえば言葉はなくても、



(了)

生活や関わり、交わりの中で育てにあずかったのだなあと知らされるのは、自分にも思い当たることであります。祖父は念佛者ではありませんでしたが、お地藏さんに灯をともしに行つたことが幼いながらに刻まれたのかなと思ふことであります。祖父は今もはたらいしておられます。無常は驚くべきことではないぞと教えられてもやはり驚いて、泣き、わめくのが人間だと思ひます。その愚かさ、一方でいくばくかのあたたかさに見出す者が「はかりなき光とはかりなきいのちのまこと」であります。〔称我名号 下至十声〕のお言葉は、「どんなことをしても必ず我が浄土に生まれさせる」という大悲がこもっているものであります。その大悲を告げ知らせるものが、一声のお念佛であります。何時まで聞けるかは分かりませんが、今はひたすら大悲のおこころを聞かせて頂きたいと思つています。

## 【住職雑感】

私は法話であまり政治的なことは話しません。というのは政治的な考えは人それぞれによつて皆違つているからです。ですから法話の中で一つの政治的な立場でお話をしますと、来ている方の中で、それに反発して、もう仏法を聞かなくなるということがあるからです。

かといつて、仏法は政治的見解と無関係ではありません。仏教には仏教の世界観があります。その世界観はたとえば教育勅語の世界観とは違ひます。教育勅語は日本を中心に日本に事が起きれば日本（あるいは天皇）のために国民は生命を差し出してよいというところへ導かれる思想内容を持つています。

しかるに日本の国家政策がいつも正しいとばかりは到底いえません。時には戦前のように帝国主義化する場合があります。そうするとその国策に従つてしまつたと大變悲惨なことになります。

仏教の世界観は日本が中心ではありません。一切衆生（人類）を平等に見る眼（佛智）から世界を見ています。人類は平等であり、仏の子である

という世界観であり、ことに「殺すなかれ、殺さしむることなかれ」との積尊の大事な教えがあります。

もちろんこの世ですぐにこういう理念が実現できるわけではありませんが、しかしそれが本当だという価値観はもてます。そしてそれに従つて日本を考える眼をいただきます。

そうすると私たちはどういう政治的行動を取るか、たとえば一票をだれに投じるかということに関わつてきます。ですから仏教を敬い信じる生き方と、この世を政治的にどう生きるかとは深い関係があるのです。そういうわけで法話の中に政治的な話が入るのも自然です。

ただこの世にはいろいろな考えを持つ人がいますから、そういう人も仏教は排除しないことを考へて法話は話されなければならぬのでしよう。



(了)

## 【法味寸言】

佐々木蓮磨師

- 一、しくじつたと後悔するのは、自分の力を信じすぎた罰。
- 一、恥をかいたと悩むのは、自分の悪を知らぬ罰。
- 一、気にさわるもののあるのは、我が儘（まま）の証拠。
- 一、希望は若さを生み、失望は老いに導く。
- 一、感謝は世を明るくし、不平は世を暗くする。
- 一、理屈の多いのは実行の少ない証拠。

## 【遠方法話予定】

- \*五月十九日から二十一日。福井別院。午後から午後まで。法話座談。
  - \*五月二十六日。名古屋市中川区高畑。高畑開法会館。午前十時～十二時半。法話座談。
  - \*七月一日。福井別院。午前十時～十二時半。法話座談。
  - \*七月五日。名古屋市中川区高畑。高畑開法会館。午前十時～十二時半。法話座談。
  - \*七月十日。大谷婦人会（京都・親鸞交流センター）午後二時。法話。
  - \*八月二十九日。名古屋市中川区高畑開法会館。十時から十二時半。法話座談。
- （詳しくは念佛寺にお尋ね下さい）